# 民国初期の修身教科書における日本モデルへの依存

方　光鋭

**キーワード**　*日本モデル　修身教科書　民国　商務印書館　中華書局*

## 1．はじめに

### 1．1．問題提起

商務印書館は 1903 年に日本の大手出版会社金港堂と合弁することによって、資金と技術力が一気に高まり、清末の教科書市場において圧倒的な優位を占めていた。光緒新政後、新教育の勃興により新書の需要が急増し、商務印書館の成功は世人の目を引き、教科書出版は最も利潤が上がりそうな分野と見なされていた。これと同時期に、1900 年の義和団事件を始めとする「排外」運動が次第に全国に波及していた。「利権回収」運動[1]の輿論に便乗し、中国図書公司（1908 年）と中華書局（1912）が相前後して成立し、商務印書館を標的として、「教育権を強く守ろう」、「外国人を資本に入れるな」、[2]「全て中国の商人が自力で運営すべきだ」、「中国人は中国人の教科書を使うべきだ」、[3]「我が国の教育文化に貢献しよう」[4]などをスローガンに掲げ、商務印書館と日本の合弁を猛烈に批判した。中国図書公司、中華書局は商務印書館と対立する二陣営となった。

1912 年 1 月 1 日、共和制の中華民国が成立した。その直後、蔡元培は「対於新教育之意見」を発表し、欧米の教育理念を大いに取り入れた新教育精神を示した。そうした激しい社会変動の下で、清末から日本に範を取ってきた中国教育界では、日本モデルからの離脱が見られるようになる一方、対立する商務印書館と中華書局は自発的かつ習慣的に日本教科書モデルに依存している。本論は後者に焦点を当て、両社の立場を分析した上で、その代表的な修身書『共和国教科書 新修身』（商務印書館）と『新編 中華修身教科書』（中華書局）を、清末以来中国に大きな影響を与えた日本国定一期修身教科書（1903－1909）に照らして比較検討することにより、「排外」運動下の日本モデル依存の実態を究明する。[5]

### 1．2．先行研究

商務印書館と中華書局のライバル関係については、中国でも日本でも数多い研究が蓄積されてきた。特に、樽本照雄著『初期商務印書館研究』では綿密な資料収集が行われている。[6] この研究では商務印書館と中華書局の成立背景、新聞紙上で繰り広げられた教科書をめぐる両社の論争などについても貴重な資料が提示されている。しかし、樽本氏自身は「本来ならば、ここで商務印書館と中華書局の発行した教科書を並べて比較対照してみたい。だが、残念ながら、現在、当時の教科書を見ることができないでいる」と述べており、[7] 一次資料が見つからないため、具体的な教科書に基づく比較分析が行われていない。中国の近代教科書史研究としては、汪家熔著『民族魂――教科書変遷』が民国の代表的な修身教科書として商務印書館『共和国教科書新修身』と中華書局『中華初等小学修身教科書』に言及しているが、具体的内容に立ち入って分析していない。[8] 本論は以上の先行研究を踏まえて、中華書局が商務印書館と日本の合弁を批判するにもかかわらず、日本の修身教科書を模倣、借用した実態に注目し、詳細に分析する。

## 2．商務印書館とライバルの中華書局

### 2．1．中華書局と商務印書館の教科書宣伝合戦

1912 年 1 月、商務印書館の出版部長兼『教育雑誌』主編及び師範講義部主任を務めた陸費逵（1886－1941、陸費は複姓、字伯鴻）は、商務印書館から独立して中華書局を創立した。[9]「中華書局宣言書」からその成立宗旨を見てみよう。

> 立国の本は教育にあり、教育の根本は実に教科書にある。教育を革命しなければ国の基礎は終に固めることができない。教科書を革命しなければ教育の目的は終に達することができないのである。今までは異族に政権が握られ、政体が専制であり、束縛し、全面的に圧力をかけた。教科用図書は甚だ牽制を受けた。自由真理、共和の大意は教えられず、国家の概念も不明であり、最近の出来事も率直に伝えることは禁忌であった。哀れ、未来の国民、どうしてこのような精神的虐待を受けなければならないのか。[10]

ここには、清時代の専制政体によって多くの束縛を受けた教科書について、「自由真理」、「共和の大意」の欠如、「国家の概念」の不明、時事的記述の抑圧などの問題を指摘し、教科書を革命しようとする強い意気込みが示されている。

清末の教科書市場は商務印書館にほとんど占有されていたから、「教科書革命」とは商務印書館の教科書を革命することでもあった。また、革命の具体的内容について、「中華書局宣言」は次のように述べている。

> これから民約の説が世に広がり、自由の花が輝くだろう。我国が日々文明に邁進し、中華民族が幸せになることはわれら同志の願いである。ここに本局の宗旨を列記しておく。一、中華共和国の国民を養成する。二、人道主義、政治主義、軍国主義を採用する。三、実利教育を重視する。四、国粋と欧化を融合する。

ここには「民約の説」、「自由の花」など当時最もポピュラーな思想が盛り込まれている。中華書局宗旨として掲げられた四綱も、直後に初代教育総長蔡元培が発表した新教育五綱の「軍国主義」、「実利主義」、「徳育主義」、「世界観教育」、「美感教育」及び国粋と欧化の融合、「自由、平等、博愛」の公民道徳とほぼ一致している。[11] その後の広告でも、中華書局はその新しさ（「新」）及び新教育精神との一致を繰り返して強調している。例えば、 1912 年 2 月 26 日付『申報』には次のように述べている。

> 清帝は退位し、民国は統一され、政治革命が既に成功を収めた。今や最大の急務は教育革命である。本局は秋から小学校用書に取り組み、今既に最も新しい学説を盛り込んだ版を刊行し、**教育部により公布された独立、自尊、自由、平等の精神に従い、人道、実業、政治、軍国**の主義を取っている（太字の部分は広告の原文で大きな活字を使用している）。

中華書局が「新」を前面に押し出したのは、明らかに老舗の商務印書館を意識したものと思われる。この点は 1913 年 8 月中に『申報』[12] で繰り広げられた中華書局と商務印書館の宣伝合戦からはっきりと窺われる。例えば、『申報』では、民国後、小学校が清時代の 2 学期から 3 学期に変更されたことに対して、「（商務印書館の「共和国教科書」は）相変わらず 2 冊に分けられ、分量が不揃いで、新規定に合致していない」、[13]「秋季共和国教科書は旧本を分割して作ったもので、用を足さない」[14] と、中華書局が商務印書館の「旧」を攻撃している。論戦は次第にエスカレートして、焦点は単なる新学制の遵守如何の問題に止まらず、商務印書館と日本の合弁という最も世間の注目するところに持って行かれた。

1913 年 8 月 15 日付『申報』において、中華書局は日清戦争（甲午年）と北

清事件（庚子年）の賠償金に関する教科書の記述について次のように述べている。

> 本社の教科書は、国恥と租借割譲地についての国民教育を重視する。某書館には憚るところがあるようで、賠償については庚子の 4 万 5 千万両だけを言い、甲午の 2 万 3 千万両に言及しない。[15]

この「某書館」は言うまでもなく商務印書館を指している。「憚るところがある」というのは、商務印書館が日本との合弁のため、日清戦争の賠償金について詳しく記述しないことを揶揄しているのである。これに対して、商務印書館は 1913 年 8 月 16 日付『申報』で次のように反論している。

> 前の最新国文では土地割譲と賠償について詳細に述べており、共和本も分量は少ないが触れている。また、教授法の中で甲午の賠償を詳しく説明している。本館の共和本は、外交の失敗を続けて３課にわたって叙述しているが、某書局は、租借割譲地の１課があるだけだ。[16]

この両社の論戦は、まさに鄭孝胥 [17] が述べているように、「商務印書館と中華書局は、教科書売込みのために新聞紙上で互いに中傷し合ってい」たと言えるだろう。[18] そして中華書局は遂に論争の焦点を商務印書館に最も大きな打撃を与える日本との関係に絡ませるようにした。

### 2．2．陸費逵と張元済の教育観

当時の中華書局と商務印書館の性格を明らかにするには、上述した両社の論戦の前に、そもそも中華書局の創始者陸費逵と商務印書館のキーパーソン張元済（1867－1959、字菊生）がそれぞれどのような教育理念、政治態度を持っていたのかについて検討する必要がある。

陸費逵は若い頃から『時務報』を閲覧し、新思想の影響を受けた。南昌で正蒙学堂を経営､武昌で新学界書店を創設し､革命関係書籍を売るなどしている。革命団体日知会に参加し、革命活動を行った。1905 年『楚報』の主筆を務め、張之洞によって封鎖されて上海に逃亡した後は､1909 年春から中華書局が成立する直前まで商務印書館の要職を務めていた。1906 年（明治 39、商務印書館に入社する 2 年前）に陸費氏が書いた「著作家的宗旨」（「著作家の宗旨」）が彼の教育観をはっきりと示しているので、以下にその一部を引用する。

> 全国の学堂で使用されている教科書を考察すると、恐怖を感じない者があるだろうか！彼の日本は満州にいかなる関係があるのか、干戈が収まったばかりなのに、なぜ嘉納をその教育に関与させるのだろうか。我が国の教育がまだ芽生えたばかりのところだが、（外国の）書籍、教学用具の販売が相次いで我が国に殺到してきた。我が国民はまだ目覚めていないのか、印度は英国人の教育に薫化され、台湾人は日本人の教育に薫化され、既に以前の印度、台湾ではない。書籍は誠に最も善い無形の感化物であり、国を滅ぼすには武器などが要らないほど巧妙なものである。私は学識が浅くて、読者に博引傍証できないが、読者にはただポーランドの亡国史、ベトナムの亡国史、エジプト史、ユダヤ史を読んでみてほしい。更に英米の国民読本、日本の小学読本を参照しながら、我が国で外国人に編集された各教科書を読んでみてほしい。ああ、神様！（筆者訳、以下同様）。[19]

日露戦争中の 1904 年 12 月から日本軍に占領されていた中国の「満州」地方では、「軍政署員勧誘指導の下」に、当地の郷紳より「公学堂教育」が実施され始めた。[20]1905（明治 38）年 4 月 12 日、時の遼東守備軍軍政長官神尾光臣は軍司令官の指示により遼東守備軍副第 2068 号を以て各地の軍政委員に対して、「其ノ教授課目ハ奏定学堂章程ニ準拠シ之ヲ取捨折衷シ之ニ日語ノ一科ヲ加レルコトヽセハ可ナランカ。（中略）聘用教師ハ勿論日本人ナルヘク……」という。中国人教育に関する通牒を発し、これが 1907（明治 40）年まで続いていた。[21] つまり陸費氏の文章が発表された 1906 年の時点においては、「満州」とその地の教育は日本軍の軍政治下にあった。陸費の言う「嘉納」は弘文学院を創立し、中国人留学生教育に深く携わった日本人嘉納治五郎のことであろう。陸費は「満州」の教育に干渉した日本、及びそれを招いた無能な清朝政府に対して怒り心頭に発したのである。日露戦争以後、ロシアの代わりに日本が中国の「満州」における権益を得たので、世間一般は恐らく陸費氏と同じように、中国「満州」の権益を奪った日本は、また中国全土の教育権を狙っていると考えていたであろう。「書籍、教学用具の販売が相次いで我が国に殺到してきた」というのも、明治 38 年前後における日本の中国への文化進出の有様を指している。当時、日本へ留学する中国人が急増し、中国でも日本でも中国人向けの出版事業、教育用具の制作、販売を盛んに行っていた。[22] 日清戦争後、中国における外国書籍市場はほぼ日本の出版社に占有された観があり、[23] 陸費のような中国知識人は強い警戒心と嫌悪感を抱いていたのである。

更に当時の中国では英米、日本の教科書を模倣したり、翻訳教科書をそのまま使用したりしていたから、中国で使用されている教科書と外国の教科書は非

常によく似ていた。この状況を念頭に置いて、陸費は読者に「英米の国民読本、日本の小学読本を参照しながら、我が国で外国人に編集された各教科書を読んでみてほしい。ああ、神様！」と注意を呼びかけ、そのような教科書に「薫化」されたら、ポーランド、ベトナム、エジプト、ユダヤと同じように亡国に至ると強く訴えている。この陸費の考え方は、後に商務印書館の編訳所長となる張元済の「答友人問学堂事書」（「学堂について友人の質問に答える」、1902 年）を彷彿させる。そこで張元済は次のように述べている。

> 西洋人の教科書をそのまま使用してはならない。児童は入学の初期には、頭脳が白紙であり、先に間違ったものが入ると、消し去りにくい。洋文の読本を自分たちで編纂すべきである。[24]

上に引用した言論から分かるように、陸費と張はともに外国教科書の同化作用を危惧しており、同様に「文明排外」的教育観を持っていた。それでは、二人及び二人が代表する商務印書館と中華書局はどこが異なっていたのか。1912 年 1 月に中華書局が刊行した雑誌『中華教育界』創刊号に掲載された「中華書局宣言書」には以下のように記されている。[25]

> 我ら同志は黙って時勢を察し、宗国を愛惜して、心痛を抱いていたが、表に現わしてはならなかった。幸いに武漢蜂起が起き、各省が応援し、人々が皆漢民族の政権を思ったので、私が孤独でないことを知った。民国がいよいよ成立したが、相応しい教科書がない限り、革命の最後の勝利は得られない。同志を集めて編輯に取り込み、半年かかって少々成果を収めた。小学用書は既に終わり、中学、師範の教科書が編纂されているところである（筆者訳、以下同様）。[26]

陸費は新しい教科書の編纂を革命活動の最後の重要な仕上げとして位置づけている。また、「我ら同志は黙って時勢を察し、宗国を愛惜して心痛を抱いていたが、表に現わしてはならなかった」と述べて、人目を避けて教科書を編纂し、商務印書館から独立した理由をさり気なく弁明しながら、中華書局が革命を擁護する書店であることを大いにアピールしている。そもそも革命組織日知会に参加し、『楚報』の主筆になった陸費は革命の成功を固く信じていた。これに対し、商務印書館の張元済は「話が革命に及ぶと、いつも首を横に振った。ついには、革命は成功するはずがない、教科書を改める必要はないと断定するのである。しかし、伯鴻（陸費逵）は（革命後に）適した教科書一揃をいひそかに

準備し、秘密の裡に書局を組織した」。[27] 商務印書館は来るべき新しい情勢には応じようとしなかったのである。張元済は開明官僚出身であり、「戊戌変法」に参加したために懲戒免職となった苦い経験から、革命の成功には期待していなかった。つまり、陸費逵と張元済教育観は革命に対して楽観的か悲観的かの違いはあるが、教育上、同様に「文明排外」的傾向を示していたのである。

## 3.『共和国教科書 新修身』(1912) と『新編 中華修身教科書』(1913)

1900 年代からの「利権回収」運動を背景に、商務印書館のライバルの中国図書公司（1908 年）と中華書局（1912 年）が相次いで設立された。やがて中国図書公司が経営不振に陥り、商務印書館に買収されたため、中華書局成立後の修身教科書市場は商務印書館と中華書局に二分されることになった。[28] 辛亥革命後、日本資本が投入されていることを理由に商務印書館への攻撃が高まり、教科書の審査対象から外されるなどの妨害もあった。[29] そうした厳しい状況の中で、商務印書館と中華書局はどのような修身教科書を出版していたのだろうか。また、日本モデルを遠ざけることはできたのだろうか。以下に、中国の修身教科書に大きな影響を与えた日本国定一期修身教科書（1903－1909）を基準として、教科書をめぐる論戦でしばしば批判された商務印書館の『共和国教科書 新修身』(1912 年）とこれを批判した中華書局看板シリーズの一冊『新編 中華修身教科書』(1913 年）を取り上げ、その細部を具体的に分析していきたい。

商務印書館版『共和国教科書 新修身』（初等小学校用、全８冊）は 1912 年 6 月、中華書局版『新編 中華修身教科書』（初等小学校用、春季始業、全 8 冊）は 1913 年 11 月に出版されている。両書はともに、1912 年 9 月 28 日、部令第 12 号「教育部公布小学校令」に規定された初等小学校の 4 年制と一致し、三学期に 2 冊を使用する設定となっている。

### 3．1．編纂方法

日中共同制作の『最新 修身教科書』(1905）以来、商務印書館の修身教科書には日本の修身教科書に倣って児童の興味を引くように豊富な挿絵が盛り込まれている。『共和国教科書 新修身』では引き続きそのノウハウが生かされている。中華書局版『新編 中華修身教科書』も挿絵が多く、特に第四冊まではほぼ課ごとに挿絵が盛り込まれている。それは中華書局の創立者陸費逵は元商務印書館出版部長であったので、そのノウハウを熟知していたためであろう。

また、徳目の配列について、『共和国教科書 新修身』の「編輯大意」は「本

書の八冊は円周法を採用している」と明記している。「円周法」とは徳目を循環させる編纂方法であり、日本では「環状教案」とも言う。『共和国教科書 新修身』と『新編 中華修身教科書』を通覧すると、両書はともに学年により徳目を漸次加えて、重要な徳目を繰り返していくという「段階教案」と「環状教案」を併用している。内容については、両書はともに「兵役」、「教育」「選挙」、「納税」など近代的な徳目を説明する文章を大いに使用しているが、第一冊から第七冊までは圧倒的に人物の物語が多く、全体的に「徳目基本主義」と「人物主義」を併用している。それらの特徴は『最新修身教科書』及び日本の国定一期修身教科書とほぼ一致する。[30] 要するに、両書の基本的編輯方法は商務印書館と日本金港堂が共同制作した『最新修身教科書』のノウハウを受け継ぎ、日本の国定一期修身教科書モデルを踏襲している。

『共和国教科書 新修身』はそれまでの編輯方法を踏襲する他に、日本国定修身教科書にさらに一歩近づいている。第五冊目から文がやや長くなり、課によって本文の後に徳目の趣旨を示す「格言」が置かれる場合がある。このような形は日本の国定修身教科書にも見られ、例えば、『共和国教科書 新修身』第五冊第三課「惜時」の最後には「格言 時者金也」(時は金なり)と記されているが、同じ格言は、日本国定一期修身書の尋常小学第四学年第十課「時を重んぜよ」の最後にも「時ハカネナリ」として付されている。[31] この形はそれまでの日中共同制作の修身教科書にはまだ見られないから、『共和国教科書 新修身』を編輯する際に、商務印書館は以前の編輯方法を踏襲しただけではなく、日本の国定一期修身教科書を改めて参照したと考えられる。

### 3．2．国際主義的内容の借用

【商務印書館版『共和国教科書 新修身』の場合】

商務印書館版『共和国教科書 新修身』には、第五冊第 3 課「惜時」(ダ・ゲッソー)、第六冊第 2 課「苦労」(コロンブス)、第六冊第 12 課「仁勇」(ガリバルティ)、第六冊 17 課「愛国」(ワシントン)、第七冊第 7 課「堅忍」(コロンブス)などの西洋人が登場している。「惜時」、「苦労」、「仁勇」、「愛国」、「堅忍」などの徳目は、従来の修身教科書にすでに盛り込まれており、新しい徳目ではなかった。しかし、同じ商務印書館発行の『最新修身教科書』には外国人が一人も登場していないことと比べれば、はるかに前進している。その目的は、「編輯大意」に「本書は児童の歴史観念と世界観を養成するために中外の物語を併用している」とあるように、「世界観を養成する」ためであったと考えられる。西洋人を登場させることは、一般的な意味で確かに世界観教育と言えるからである。しかし、その編纂の直接的背景としては、1912 年 2 月 11 日、民国の初

代教育総長蔡元培が「対於新教育之意見」を発表して、新教育精神を示し、新教育五綱の一つとして「世界観教育」を掲げたという事実があった。この新教育方針に応じて、商務印書館は 1912 年 6 月に『共和国教科書 新修身』を出版したのである。つまり、「編輯大意」の「世界観を養成する」という方針は、蔡元培の新教育五綱を反映しようとする意図からであった。ところが、蔡元培は「世界観教育」について次のように定義していたのである。

> 思想の自由、言論の自由の公理を求めて、一流派の哲学、一宗門の教義に縛られず、常に形もなければ終始もない世界を鵠的とする。このような教育を何と名付けべきか分からないので、世界観教育としておく。世界観教育は毎日煩く講じてはならない。そして、それは現象世界との関係も安易な説を使って唐突に講じたりすれば理解できるものではない。そうだとすれば、何を道とするのか？　曰く、美感教育である。美感は、美麗と尊厳を含み、現象世界と実体世界の間の架け橋である。[32] カントに創造され、その後の哲学者でこれに反対した人はいない。[33]

以上の定義を見れば、『共和国教科書 新修身』では蔡元培の「世界観教育」が誤解されたとまでは言えないにしても、その見解にかなりのズレがあることが分かる。少なくとも、「世界観教育」、「美感教育」といった抽象的で当時の人々に馴染みがなく、教科書に反映しにくい西洋哲学と関る概念を、余儀なく「西洋人」という符号によって置き換えたと思われる。そして、それは日本の修身教科書からヒントを得たのではないか。日本の国定一期修身教科書（1903－1909）は、国際主義的性格がその特徴の一つとされる。そこには高等小学二年までの六年間に、9 人の西洋人が十八課にわたって取り上げられている。[34]『共和国教科書 新修身』は日本の国定一期修身教科書に倣って西洋人を登場させており、西洋人が登場する物語そのものを借用したケースも多数見られる。例えば、『共和国教科書 新修身』第五冊第 3 課「惜時」は次のように述べている。

> 法人达葛沙每日至餐室携纸笔自随。如食具未陈辄以其暇时记录所见。如此十年积成巨帙。格言　時者金也
> （ダゲッソーというフランス人は毎日紙と筆を食堂に持って行きます。食器の準備がまだできていないときには、その時間を利用して、気付いたことを書き記しておきます。こうして十年のうちに、巨著になりました。　格言 時は金なり）（筆者訳、以下同様。）

日本国定一期修身教科書の尋常小学校用第四学年第 10 課「時を重んぜよ」もフランス人ダゲッソーが食堂で待たせられる時間を利用して、考え付いたことを書き記し、十年して、立派な本を書き上げたという内容である。しかも、話の最後に「時ハカネナリ」という同じ格言が付されている。[35] 日本の国定一期修身教科書は 1903 年（明治 36）に出版されているので、『共和国教科書 新修身』の「惜時」が日本国定一期の「時を重んぜよ」を借用したことは明らかである。

また、『共和国教科書 新修身』第七冊第 7 課「堅忍」はコロンブスが新しい大陸を探すために、様々な苦難を乗り越えて、最後にとうとうアメリカ大陸を発見し、世に知られるようになった物語である。[36] 日本国定一期修身教科書高等小学校用第一学年第 23 課「忍耐」も、同じくコロンブスが新しい大陸を発見したことを語っている。[37]『共和国教科書 新修身』の「堅忍」は日本国定一期の「忍耐」の後半と内容がほぼ同じであり、「堅忍」は「忍耐」の後半を借用して、書き直していると考えられる。

【中華書局『新編 中華修身教科書』の場合】

日本国定一期修身教科書の内容を借用したケースは、中華書局版『新編 中華修身教科書』にも多数見られる。例えば、日本国定一期修身教科書の高等小学校用第二学年にリンカーンに関する物語が何課か盛り込まれている。その中の第 12 課「勉学」はリンカーン（リンコルンと記されている）が父親の畑仕事を手伝いながら、暇な時間を利用して勉強するという物語である。『新編 中華修身教科書』第五冊第 17 課「勤学」は、この課の物語を少々削除して使用している。[38] 特に両者の細部描写を比較してみると、前者の「勉学」に「暇あれば、もえさしの枝をもって、板の上に、文字を習ひ、その所持せる三冊の本を、いくたびとなく、読みて、おほかた、これを暗誦するにいたれり」に対して、[39]「勤学」では「一遇暇晷。輒取树枝烧炘。习字木板上。所携惟读本三册。均能成诵」（暇な時があれば、燃え差しの枝を持って、木の板の上に字を練習していました。常に読本を三冊持っていて、全て暗記できるようになりました）となっており、日本の修身書の内容をほぼそのまま翻訳していることが分かる。

また、『新編 中華修身教科書』第五冊第 18 課「爰物」はリンカーンが泥の中に陥った豚を救い出して、自分の洋服を泥だらけにした物語であるが、[40] 日本国定一期修身教科書の高等小学校用第二学年の第 14 課「同情」にも同じ内容が記されている。[41] さらに、『新編 中華修身教科書』第五冊第 19 課「正直」[42] と日本国定第一期国定修身教科書の高等小学校用第二学年の第 13 課「正直」[43] も同様で、商店の番頭を務めていたリンカーンが間違って多く受け取った代金を客に返しに行った物語であり、前者は後者の前半の内容とほぼ同じである。

更に、上述したリンカーンが登場する課の配列に注目したい。日本の国定一期修身教科書では、リンカーンは高等小学用第二学年第 12 課「勉学」、第 13 課「正直」、第 14 課「同情」の三課にわたって連続して登場する。それを借用した『新編 中華修身教科書』でも同じように、第五冊第 17 課「勤学」、第 18 課「愛物」、第 19 課「正直」の三課にわたって連続して配列している。商務印書館版『最新 修身教科書』を含めて民国までの徳目主義の修身教科書では、このような配列方法は見られず、逆に一冊の修身教科書に様々な人物を登場させているため、同じ人物の場合も分散して配列する傾向がある。そうした同一人物の連続的配列は、当時日本の国定修身教科書で流行していたヘルバルト派人物伝記主義を改良した配列方法である。吉田熊次の「国定修身書の編纂」によれば、その頃は「ヘルバルト派の所謂人物伝記主義と称する所の、同一人物の伝記に依りて多くの徳目を結局（ママ）することが流行して居た。民間の或修身書の如きは一学年を通じて二三人の伝記を授け、其の中に数十の徳目を配当するのである。その結果として牽強附会の説明が多く徳目の本義を明にする事を不可能ならしめた。国定修身書にては斯かる欠点を避けつゝ人物基本主義の長所を失はざらしめんがために、同一人物に数個の徳目を配当することを原則とした」という。[44] つまり、『新編 中華修身教科書』は日本の国定一期修身教科書から内容を借用するに際して、ヘルバルト派の人物伝記主義の配列方法も一緒に模倣したと言える。ここでは、リンカーンに関する課の配列だけでなく、他の中国の人物が登場する課でも類似した配列方法を活用しており、例えば、第五冊第 5 課「族誼」、第 8 課「自任」、第 9 課「改過」の三課ともに「範仲淹」を登場させている。

また、『新編 中華修身教科書』には西洋人を登場させる他に、外国人に関係する内容をも取り上げている。第八冊第 16 課は「対外人」と題して外国人を取り扱う時の心得についての内容が盛り込まれ、国際主義的性格が一層強くなっている。1905 年に『最新 修身教科書』を編纂した際に、日本金港堂側の編纂者は「附録 日本人所擬蒙小学校読本材料」（日本人擬する所の蒙小学読本材料）を提示した。[45] そこでは、読本に適する材料が項目別に並べられ、「修身」の項目に「待外国人之道」（外国人に対する道）が含まれているが、結局『最新 修身教科書』の段階では採用されなかった。当時の日本国定一期修身教科書にも類似した内容がある。例えば、高等小学巻三第 24 課「外国人」では「内国人に対して守るべき心得は外国人に対しても、同様に守るべきなり（中略）わが国に来る外国人は、多くは、わが国の言語、風俗に通ぜざるものなれば、親切に取り扱うべし」と述べている。[46]『新編 中華修身教科書』第八冊第 16 課「対外人」にも「我之于人然。人之于我亦然。交际之道。固无分本国人外国人也」（我

等がこのように外国人を取り扱うならば、外国人も同じように我等を取り扱うであろう。交際の方法は本国人と外国人の間に区別がない）とあり、同じ趣旨の内容が記されている。[47]

ところが、注目すべきことに、『共和国教科書 新修身』においても、『新編 中華 修身教科書』においても、日本の修身教科書の内容を借用し、外国人を教科書に登場させる一方で、『新編 中華修身教科書』第七冊第 7 課「自尊」に「日儒福沢諭吉嘗挙独立自尊為徳育大綱」（日本の学者福沢諭吉は嘗て独立自尊を徳育大綱に挙げた）と一箇所だけ日本人に言及する以外には、日本人を一人も盛り込んでいない。直接的な原因としては、言うまでもなく、日本と合弁したため厳しく批判された商務印書館は日本に関る内容を出来るだけ避けたかっただろうし、商務印書館のライバル中華書局も同様だっただろう。しかし、最も根本的な原因は当時の中国人の日本観にあったのではないかと思われる。「路近、省費可多遣」、「去華近、易考察」、「東文近於中文、易通暁」（路近くして費を省き多くつかわすべし、華を去ること近くして、考察しやすい、東文は中文に近くして、通暁しやすい）などの便宜性を考えて、日本を近代化のモデルとする考え方は、張之洞のような官僚たちだけではなく、知識人の中にも急速に広がっていた。この考え方の背景には、日本は近代文明の本場ではなく、その媒介者にすぎないという認識が潜んでいた。例えば、清末の啓蒙思想家であり、「戊戌変法」の失敗後、日本に亡命して横浜で改良主義的な『清議報』を発行した梁啓超は、「日本文を学ぶ利益を論じる」（1899 年、明治 32 年）において日本語を勉強し、日本の書籍を通じて近代化を図ろうとすることに反対する人々の疑問を次のように想定している。

> 日本の学はヨーロッパから来たものにすぎない。ヨーロッパの学の最先端をいくものや、そのエッセンスの多くは日本に入っていないし、かつ重訳を経ればもとの姿を失いがちである。日本文を学ぶよりは英文を学んだ方がよい。

このように世間の疑問を想定した上で、梁啓超は「その日本は最先端やエッセンスにおいては欠けるものがないではないが、大体のところはおおむね具わっている」として、その疑問を半ば認めながらも、それは「久しく糟糠に倦んだ人が、鶏肉や豚肉にあずかって充分腹を満たすようなものであり、必ずしも供えものがそろってから礼を行うという必要はない」と述べている。[48] また、「日本文を学ぶには数日で小成し、数ヶ月で大成する」という利便性も強調している。つまり、近代化の目標は欧米に求めるとしても、日本という媒介者を通じ

た方が現実的で近道であり、しかも充分当座の用を足すことができると考えられていた。こうした中国人の日本観を背景に、日本の教科書の編纂方法を自主的、積極的に取り込む一方、理想的な国民像としては日本人ではなく、文明の本場とされる欧米人を大いに登場させることになったのではないか。この意味で、民国初期の日本修身教科書モデルへの依存は、教育対象とされた当時の小学生の立場からは、看取されにくい潜在的な形で存在し、日中国民感情の親密化に直接繋がるものとはならなかったのである。

### 3．3．全徳目の要約的人間像

日本の国定修身教科書は各学年の最後に様々な徳目を要約した課目を盛り込んでいる。例えば、尋常小学第二学年第 27 課「良い子供」、第四学年第 27 課「よい日本人」、高等小学第二学年第 28 課「よき日本人」である。以下に第四学年第 27 課「よい日本人」を一例として見てみよう。

> （前略）われらは、つねに、学問をはげみ、知識をみがき、めいしんをさけ、身体をじょーぶにし、ゆーきをやしなひ、こころざしをかたくして、にんたいのしゅーかんをつくらねばなりません。また、正直で約束を守り、時をむだにせず、きんべんで、けんやくで……（後略）[49]

以上の例から分かるように、勉強した徳目がほぼ網羅的に並べられ、具体的な人間像は全く見えない。この点について、吉田は当時の事情を次のように説明している。

> 国定修身書の初に問題となつた他の一事件は、徳育上のモットーを造りたいと云ふことである。英国民はゼントルマンを理想とし、仏国民はシトアヤンの一語に服する。我が国でも、之に類せる標語がほしいと云ふのであった。国定修身書の各巻の総括として「よい子供」とか「良い日本人」とか題して、全巻の徳目を稍組織的に反復したのは、斯る趣意に基づいたものである。[50]

しかし、国定修身教科書におけるこのような要約的な人間像は大いに批判された。「英国のジェントルマンや仏国のシトアヤン等の、長い歴史を通じて形成されてきた歴史的・民族的個性の豊かな人間像に対するに、（中略）修身教科書におけるこの「よい日本人」の課目が一番平板的であり、しかも、教科書の全徳目を羅列したものであるだけにわかりきっていて退屈極まるものであったと

いうことは、これを学んだ人たちが口をそろえて述べる感想でもある」[51] と唐沢富太郎は指摘している。ところが、『共和国教科書 新修身』も『新編 中華修身教科書』も以上の失敗した国民像作りを繰り返し、課目設定まで模倣していた。例えば、商務印書館の『共和国教科書 新修身』第八冊第 18 課「好国民」には「自分に対して徳を修め、学習し、衛生的で、勤労し、倹約し、勤勉に働く。家族に対して、親孝行し、兄弟を愛し、子女を教育し、親族と仲良くする。社会に対して、敬老し、……（後略）」とあり、日本の国定修身教科書と同様に第八冊に言及した徳目を網羅的に並べている。[52] この「好国民」は日本の国定修身教科書における「良い日本人」の理想的日本人像と全く同じ編纂方法であり、「徳目によって構築された血の通わない冷たい彫像のようなものであった」。[53] 日本の国定修身教科書が「良い子供」のような課目を通じて、「徳育上のモットー」を造ろうとしたその意図を、『共和国教科書 新修身』の編輯者がよく理解していたかどうかは疑問であり、「好国民」の課目を通じて理想の国民像を示そうという自覚もなかっただろう。中華書局版『新編 中華修身教科書』の第八冊第 18 課「中華国民（一）」、第 19 課「中華国民（二）」、第 20 課「中華国民（三）」も同様に、第八冊に言及した徳目を３課に分けて全て盛り込んでいる。ここでは内容の引用を省略するが、民国を代表する二つの修身教科書は、内容をよく吟味せず、そうした日本の国定修身教科書を機械的に模倣した部分も見られるのである。

## ４．おわりに

上述したように、中華書局は教科書売り込みのために輿論を利用して、ライバル商務印書館の日本との合弁を標的として、激しい「教科書戦争」を展開した。商務印書館は日本との合弁によって教科書の出版に大きな成功を収めたが、本格的な日本教科書の編纂ノウハウを中国にもたらしたと同時に、書館にとって大きな不利益をも招いた。それはこの時代のジレンマであったとも言えるであろう。清末民初、日本の修身教科書をモデルとする吸収、批判、排除を含めたプロセスにおいて、資金、方法、内容（近代的国民の理想像）の三要素が連動しながら、時には相互に齟齬する様相を呈していた。そもそも商務印書館は資金と技術のサポートを求めるために、日本の金港堂と合弁したのである。しかしながら、商務印書館は日本の資金、技術を導入したことが教育権の喪失に繋がるとされたために、痛烈な批判に曝された。その結果、1914 年 1 月に商務は金港堂との合弁契約を解消し、日本の資金を排除するようになったのである。

ところが、編纂方法については、「排外」的社会輿論に直面し、画期的な政治変動が起きたにもかかわらず、商務も中華も日本教科書ノウハウを踏襲し、近代的教科書のペースとして次第に定着させつつあった。また、民国元年の教育方針には欧米の抽象的教育理念が盛り込まれたが、それを消化する能力、余裕を持たなかった出版界は、最も身近に存在した日本教科書に解決策を求めた。日清戦争、「排外」運動を経て、日中の国民感情が悪化しつつあったなかで、商務印書館は勿論、「中国人は中国人の教科書を使うべきだ」と主張した中華書局も、結局、教科書の編纂方法、内容においては、日本モデルへの依存から脱してはいなかったのである。

## 注

1 利権回収運動は 19 世紀末、中国、清朝が列強に与えた鉄道や鉱山の利権を回復し、民族資本によって運営しようとした行動。
2 「中国図書公司縁起」、『申報』光緒三十四年四月初二日（1906.4.25）
3 朱聯保編纂『近現代上海出版業印象記』、学林出版社、1993 年。
4 陳寅「中華書局一年之回顧」、『中華教育界』、民国（1913）2 年 1 月号、p.2.
5 民国初期の修身教科書に見る日本モデルからの離脱については、別稿で論じている。拙著「日本モデルからの離脱―民国初期の教育方針と『新編 中華修身教科書』」、（『或問』第 22 号、近代東西言語文化接触研究会、2012 年 10 月）を参照されたい。
6 樽本照雄『初期商務印書館研究』（増補版）、清末小説研究会、2004 年。
7 同上、p.345.
8 汪家熔著『民族魂―教科書変遷』商務印書館、2008 年。
9 中華書局の成立に関しては、陸費逵らが商務印書館の資金繰りが苦しいことを案じ、革命の成功を見通して、周囲に隠れて小中学教科書を編輯・制作し、中華民国と同年同日に中華書局の設立を宣言したことがとほぼ定説となっている。中国の出版史研究者汪家熔氏は、この陸費逵を裏切り者扱いする説に賛同していないが、いずれにしても陸費逵が商務印書館から独立して中華書局を創立したことは間違いない。汪家熔『民族魂――教科書変遷』、商務印書館、2008 年、p.118－121.
10 陸費逵「中華書局宣言」、宋原放主編『中国出版史料・近代部分』（第 3 巻）、湖北教育出版社、2004 年版、p.159.
11 蔡元培「対於新教育之意見」（1912 年 2 月 11 日）、高平叔編『蔡元培教育

論著選』人民教育出版社、1991 年、p.1.「中華書局宣言」の掲載日付は 1912 年 1 月 20 日以前と推定され、蔡の「対於新教育之意見」より早かったが、中華書局がどのようにして民国教育部の新教育精神を前もって察知したかは不明である。

12 『申報』は近代中国において最も発行期間が長かった。また、強い影響力を持っていた新聞の一つである。正式名称は「申江新報」で、1872 年 4 月 30 日にイギリス人貿易商のアーネスト・メジャーにより創刊されている。

13 『申報』1913.8.11

14 『申報』1913.8.15

15 『申報』1913.8.15

16 「共和国教科書/全数審定」『申報』、1913.8.16

17 鄭孝胥は詩人、書家、政治家。辛亥革命以後、商務印書館の董事の職にある。

18 鄭孝胥、1913 年 8 月 15 日付の日記、労祖徳整理、中国歴史博物館編『鄭孝胥日記』（全五冊）中華書局、1993 年、 p .1479－1480

19 陸費逵「著作家的宗旨」、『陸費逵教育論著選』人民教育出版社、2000 年、p.13　原文：「试一考夫全国学堂所用之书，有不令人悚惕者哉！彼日本于满洲何亲，而干戈甫息，遂令嘉纳谋其教育。我国教育之萌芽未茁，而营书业仪器业于我国者，踵相接也。吾国民尤未醒乎，印度为英人所熏化，已非复前此之印、台人矣。书籍诚最善之无形感化物，最精之灭国无烟炮哉。吾学识浅陋，不能为读者广征博引，吾惟愿读者读波兰亡国史、越南亡国史、埃及史、犹太史；吾更愿读者参英美之国民读本，日本之小学读本，及吾国外人所编各教科书而读之。呜呼，吾神怆矣！」

20 嶋田道弥『満州教育史』青史社、1982 年、p.116.

21 同上、p.5、117－118.

22 小林善八著・弥吉光長解説『日本出版文化史』青裳堂書店、1978 年、p.926.

23 実藤恵秀『日本文化の支那への影響』蛍雪書院、1940 年。

24 張元済「答友人問学堂事書」、『張元済詩文』商務印書館、1986 年、 p .170.

25 「中華書局宣言書」は最初に『中華教育界』創刊号に掲載されているが、その出版年月が記されていない。1912 年 1 月 20 日に上海の各新聞紙に「中華書局宣言書」が転載されているので、1 月 20 日前になると推測される。

26 陸費逵「中華書局宣言」、宋原放主編『中国出版史料・近代部分』（第 3 巻）湖北教育出版社、2004 年版、p.159.

27 蒋維喬「创办初期的商务印书馆与中华书局」、張静盧輯注『中国現代出版史料』丁編（下冊）、北京中華書局、1959 年、p.　398.

28 蒋維喬「創辦初期之商務印書館与中華書局」、張静盧輯注『中国現代出版史料』（丁編）中華書局、1959 年、 p .397.

29 そのような状況のなか、1913 年 1 月、商務印書館は日本金港堂と合弁解消の交渉を始め、1914 年 1 月に完全に解消した。樽本照雄『初期商務印書館研究』（増補判）清末小説研究会、2004 年、p.359.

30 段階教案とは徳目を数学年にわたって一通り教え終わる方法で、環状教案とは毎学年同一の徳目を反復する方法である。日本の国定修身教科書も同じ編纂方法を取る。「第一次 国定小学修身書編纂趣意報告」、宮田丈夫編著『道徳教育資料集成』第一法規株式会社、1959 年、p.70.

31 文部省著作『第一期 国定修身教科書』（尋常小学校用、明治 36 年 10 月 3 日）、海後宗臣、仲新編纂『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身』講談社、1962 年、p.26

32 蔡元培は「対於新教育之意見」では、「世界には二面があり、紙に表裏がある如く、一面は現象といい、一面は実体という。現象世界の事とは政治であり、現世の幸福を作るのは鵠的となる。実体世界の事とは宗教であり、現世の幸福を脱するのはその作用である」と、「現象世界」と「実体世界」を定義している。

33 蔡元培「対於新教育之意見」（1912 年 2 月 11 日）、高平叔編『蔡元培教育論著選』人民教育出版社、1991 年、p.5.

34 登場する 9 人の西洋人はフランクリン、リンカーン、ワシントン、ナイチンゲール、ジェンナー、ネルソン、ダ・ゲッソー、ソクラテス、コロンブスである。唐沢富太郎、『教科書の歴史―教科書と日本人の形成―』（上）ぎょうせい、1989 年、p.293.

35 文部省著作『第一期 国定修身教科書』（尋常小学校用、明治 36 年 10 月 3 日）、海後宗臣、仲新編纂『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身』講談社、1962 年、p.26.

36 『共和国教科書 新修身』第七冊第 7 課「堅忍」の原文：「哥仑布率众，渡大西洋，觅新地。航海数十日，不见陆地。同行者争欲返棹。独哥伦布坚持西方有陆之说，百端譬慰。然舟益西去，希望愈穷。曾有芦根、果实从海面飘来，众咸知去陆不远。于是人人欢跃，奋力鼓棹。未几，遂寻获美洲，哥仑布名闻于世。」

37 海後宗臣、仲新編纂『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身』講談社、1962 年、p.46.

38 『新編 中華修身教科書』第五冊第 17 課「勤学」の原文：「林肯少贫辍学。日往田野间。助父开垦。一遇暇晷。辄取树枝烧烬。习字木板上。所携惟读

本三册。均能成诵」

39 海後宗臣、仲新編纂『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身』講談社、1962年、p.54.

40 『新編 中華修身教科書』第五冊第 18 課「愛物」の原文：「林肯行路。见一猪陷沟中。哀号甚急。恻然怜之。乃觅得木板一方。投沟中。援猪出泥污满衣。」

41 海後宗臣、仲新編纂『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身』講談社、1962年、p.5.

42 『新編 中華修身教科書』第五冊第 19 課「正直」の原文：「林肯为某店经理。一日。有妇人购物。给价而去。至夜。林肯核账。知多取妇银。乃步行十余里。觅购物之妇人而还之。」

43 海後宗臣、仲新編纂『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身』講談社、1962年、p.5

44 吉田熊次「国定修身書の編纂」、国民教育奨励会編纂『教育五十年史』、p.245－247.

45 蒋惟喬「編輯小学校教科書之回憶—1897 年—1905 年」、張静庐『中国近現代出版史料』補編 6、上海書店出版社、2003 年、p.139.

46 唐沢富太郎『教科書の歴史（上）—教科書と日本人の形成—』ぎょうせい、1989 年、p.298.

47 『新編 中華修身教科書』第八冊第 16 課「対外人」の原文：「吾等对外国人宜敬之以礼。待之以诚。保护其身家。指示其疑虑。我之于人然。人之于我亦然。交际之道。固无分本国人外国人也。」

48 伊東昭雄（他）『中国人の日本観 100 年史』自由国民社、1974 年、p.66.

49 海後宗臣、仲新編纂『日本教科書大系 近代編 第三巻 修身』講談社、1962年、p.36.

50 吉田熊次「国定修身書の編纂」、『教育五十年史』国民教育奨励会、p.247.

51 唐沢富太郎『教科書の歴史（上）——教科書と日本人の形成——』ぎょうせい、1989 年、p.280.

52 『共和国教科書 新修身』第八冊第 18 課「好国民」の原文：「集众民而成国 一国之兴衰治乱 视其国民的品性 能力。故修身善行 为爱国之本务。对己则 修德 力学 卫生 习劳 以俭奉身 以勤处事。对家则孝亲 敬长 爱兄弟 教子女 睦亲族。对社会则敬老 慈幼 救贫 济困 交友以信 待人以敬 接物以诚 守公德 兴公益。对国则纳税 守法 卫国 爱众。如此 诚为好国民也。」

53 唐沢富太郎『教科書の歴史（上）—教科書と日本人の形成—』ぎょうせい、1989 年、p.281.